

〔「法学新報」第27巻5（308）号 大正6年5月1日〕

漫 録

○逝ける石坂博士に

片山義勝

拜啓暫らく中央にて御面会不申候処或は小川君の選挙後援に御出馬かと私に拝察致居候借今般貴著民法研究第四巻御新刊に付特に御惠贈に相預り御厚志不堪拝謝之至常々有益なる御研究をドシ／＼御発刊相成候事学界の為慶幸誠に不遇之御惠与の貴著は永く大切に保存し啓蒙の好資料としていつまでも御厚誼を享け可申奉存候于茲不取敢御礼申上度書中如此御座候

敬具

大正六年四月二十一日

片山義勝

石坂老台侍史

石坂君、貴著の御惠与を受けたのは十九日であつたけれども、君も御承知の通り、拙生は日日随分いそがしいのに、少少は性来の無精も手伝つて、早速御礼状を書くことが出来なかつた。二十一日の土曜、やつと右の手紙を書いて、投函に往かんとする女中の手に在る代議士当選の祝ひ状などと十本ばかりの書簡

の中から、君に宛てた右の一本を取戻すの止むを得ざるに至つたのは、噫、何んと謂ふことであらふか。民法研究第四巻は君の拙生に対する最終の友誼及奨励の御厚意であつた。而して拙生は、今やタツタ一言の御礼をすらいふことが、噫、出来なくなつてしまつたのである。

大正六年四月二十二日、往いて曙町の君の邸に、亡き君を訪れ、君に対して心ばかりの粗香を手向け、恭しく君に永久の別を告げた時の拙生の衷情、君は察して呉れなければならぬ。

君が抜群の成績を以つて東京大学を卒へ、直に京都の助教授となり、今の御令閨と芽出度婚約が整つた評判の八釜しかつた夏休、小倉袴の小川と拙生とが帰省の途次、君を洛陽鴨河畔の下宿、否ほめていつても下宿の兄サン、に君を訪ねて、鰻井の御馳走で大いに吹き飛ばされ、おまけに御新婚の御ノロケにシタカカ当てられたことがあつた。去年、小川と雉本とが文官高等試験の爲め東上したとき、久し振にて一夕の歡を尽くすべく、君も引張り出して、築地で夕餐を俱にした時、鰻井ノロケ事件やら、君の洋行の場合の横浜別離の涙やら、第一高等学校及大學に於ける法科のポート選手として度度整調であつた事やら、柔道部の達人として赤帯をしめて拙生等をやすやすとこぼした事や、口角泡を飛ばして第一高等学校の弁論部の壇上に天下を論じた事やら、何んともいへぬ面白い昔話に、感興実云ふ可からざるものがあつた。君は本来上戸ではないが、拙生どもの強制執行を受けて、満面朱の様な顔をしながら、談論風発、議論縦横、誠に元氣旺盛、所謂威武不能屈、貧賤不能移、富貴

不能淫といふ、古武士の意気を昔の其のままに、学者として大学の教授として、実にねたましい程、洋洋たる前途を持つて居ることを拙生をして感知せしめたのであつた。然り而して今年の今日、噫、最早杳として相距つるに至つたのである。天の命也など古風なことをいつたとて、拙生の痛恨が如何にして慰めらるるであらふか。

石坂君、君は学校生活に於て拙生に二年の先輩であつた。けれどもドウ云ふものか、君は恰かも同輩でもある様にして呉れるし、拙生も亦最も畏敬する友人として、又学問上の師友として、第一高等学校以来、前後約二十年を経過したのである。固より君は多年京都に居り、拙生は東京に居つたので、相会する機会も誠に少なかつた、又君が東京に来られても、相互に職掌を異にするのと御互に閑を得ないので相会する機会も実は少なかつた。さればこそ又此三週間の君の大患も実はツイ知らなかつた。けれども君の人物、君の学問、君の志操、君の意氣、其の他の君の一切に対し、拙生は或は友として、或は師として、常に敬服畏敬して居つたのである。法理研究会や、中央大学で御目にかかる毎に、拙生は法律上の問題を君に提供するのを常として居つたのである。而して心私かに君と中央大学の講義の日を同うすることを悦んで居つたのである。然り而して今や君に物を云ふことが出来なくなつたではないか。

君の学問上殊に私法上の蘊蓄と功績とは、拙生などの云為するを容るべき限りではない。ドシドシ精緻透徹の論文や、綿密卓抜の大著を公にし、研鑽一日を忽せにせず、励精倦むを知ら

なかつた学者としての君の本領、拙生実に敬仰措く所を知らないのである。君の京都に在るや、人以つて京都法学界の重鎮と為し、君の東京に移るや、人皆東京法科大学の爲めに深く慶祝したのであつた。而して今や我私法学界、是非ともなくてはならぬ学者として、举世君の将来に期待すること愈々益々厚きを致しつたのであつた。然るに一朝病んで、今、君再び起たず。曩者川名博士を喪ひ、今又君を失ふ。天の私法学界に殃する、噫、余りに無情の極ではないか。

石坂君、先日、拙生君と中央大学で相会し、小川が選挙に出馬したが、拙生は根本の主義として賛成しない。大学教授を抛つて、政界に馳駢し、経綸を天下に行はんとするのならば格別、今日財政経済学界の一大重鎮として、片手間に代議士をやるのは、小川の爲めには、大分考へ物だ、だから拙生は反対意見を送つてやつた、と君に話した時も、君も大体に於て賛成であつた。併しヤリカケで後に引けぬ以上は当選しなければいけないと云ふことに意見は一致した。之が現世に於て君と話した最後であつた。其の小川の当選を新聞電報で見て書いた当選の祝状と、民法研究の御礼状とが、一緒に重ねられて、將に投函せられんとするとき、君に対する一通を抜き取つて、小川の分は投函したのである。其の小川も今頃京都で君の長逝に対し、悲痛哀恨交々至つて居ることは察するに余りがある。

石坂君、君の慧敏明晰、殆んど匹儔なき其の頭腦を以つて、將た絶倫無敵なる其の精力を以つて、もつともつと、永い間いつまでも、民法の研究がしてほしかつた。もつともつと、我法学

界に貢献してほしかった。君の名著は長へに我学界に大に裨益することは勿論である。君の大著は逝かざる君を我学界に永く遺すこと亦いふまでもない。君の教陶を受けた学生は永く君を紀念すべき功業を世に奏するに相違はない。乍併此の如きは僅かに君の力の一端である。君の運動家たりしことが確証する君の体格と君の健康とを考へても、前途益々顕著なる貢献あることは一点の疑を容れなかつた。繰返しても今や致し方もないけれども私法学界の一大明星として、もつともつと、やつてほしかつた。否、もつともつとやつて呉れることを疑はなかつた。君を大学に於て教養せられた諸先生、君と同僚であつた人人、君と同学であつた人人、君の教陶を受けた人人、否、知ると知らざるとを問はず、拙生と同一の期待と希望とを抱いて居つたのである。然るに、噫、君は偉才を懷いて、溘焉空しくあの世に旅立を急いだのである。人をしてやるせなき落胆と悲哀と痛恨とに沈ましめてまで。思へばまた、恩愛極みなき御令閨をそのあとに遺してまで。いとしき、いたいけな、かわいかわい、おさなき御子達をそのあとにのこしてまで。

追白、拙生は文章らしい文章が書けない、君に永訣する文句のあることを知らない。だからこんな挨拶をして聊か拙生の痛恨と敬慕の衷情を公けに披瀝する、用語の失礼なところ、不作法なところは君の生平の寛仁を以つて勘忍して呉れ給へ。拙生は茲に謹んで君の冥福と、御遺族方の御健康と、それから君の大事の大事の御子様方が立派に成人なさることとを満腔の衷情を捧げて祈るのである。而して最後に君の高著

は常に拙生の左右に大切に於て永く拙生の師友として、拜見する毎に君を忍ぶことを茲に御約束する。(大正六年四月二十三日、君の葬儀ありといふ日の前夜十一時過ぎ、之を認め了つた丁度その時、ポツリポツリと窓前に雨の音がし出した。天も亦君を悲むのであらふ)。

附言「小川」「雉本」とあるは京都大学の両博士である、

呼び棄てにしては失礼であるが、石坂君に対する話としては、呼び棄てでなくては、うつりがわるい。此の段両君並に読者に御断りする。